

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

## マリー・アントワネットの首飾り

2002 (平成14) 年2月24日鑑賞

Data

監督: チャールズ・シャイア

出演: ヒラリー・スワンク / サイモン・ベイカー

### 👁️👁️ みどころ

1789年のフランス革命。主役はマリー・アントワネットなど「ベルばら」の世界だが、「革命」の視点からの主役は「ナポレオン」。舞台はロマンあふれる時代であり、魅力的な人物が多数登場する。この作品は超豪華な「首飾り」をめぐるスキャンダルだが、史実にもとづくお話し。「あの時代」にロマン感じる人にはおすすめだ。

#### ＜ベルばら時代へのあこがれ＞

この映画はあまり評判を呼んだものではない。しかし予告編を見た時の、「マリー・アントワネット」「フランス革命」「首飾りのスキャンダル」というキーワード、そして宝塚の「ベルばら」をはじめとして何となくあこがれるフランス革命前夜のベルサイユ宮殿や宮廷文化への興味から一見の価値ありと判断した。

ちょうど今、産経新聞の朝刊では、藤本ひとみ作の「ナポレオンの夜」を連載している。これはナポレオンを中心とした、フランス革命前後の時代を背景とした作品だが、宮廷の「マダム」たちの「語り」を多用するスタイルで、男社会の動きを描いている。女言葉による話しを読んでいくのは、多少まどろっこしく、もっとたくさん戦闘場面が現れないかと思いつつも、毎日楽しみに目を通している。

#### ＜フランス革命時代の法廷は・・・＞

映画はまずパリ高等法院での法廷場面から始まり、最初にこの重厚な法廷のしかけそのものに圧倒される。実際の法廷に合致しているのかどうかはよくわからないが、フランス

革命前後のフランス王政下での裁判制度のイメージはよく理解できる。主人公ジャンヌ（ヴァロア伯爵夫人）（ヒラリー・スワック）の裁判が開始されるについて、裁判長はジャンヌに「申し述べたいことがあるか？」と質問し、ジャンヌは、「自分の人生を取り戻したいと思っただけだ」と述べる。

そして、場面は一転。ジャンヌの幸せな少女時代へ移っていく。

ジャンヌはフランスの名門貴族ヴァロア家の娘として生まれたが、ジャンヌの父は改革主義者で、民衆の生活の改善を目指したため、王室に対する反逆者と見なされた。そのため殺され、領地は没収され、母親も失意の中で死亡してしまう。9歳で孤児となったジャンヌは、ヴァロア家の再興だけを一生の望みとしながら、美しくかつたくましく成長した。「たくましく」とは、たくみに男を利用するテクニックを身につけ、自己の美貌を最高に活用する世渡り術を身につける、ということだ。こういって、さぞ嫌味な、負けず嫌いの、気の強い女、というイメージとなる。しかし、スクリーン上のヒラリー・スワック演ずるジャンヌは、逆境に育ちながらも、自分の智恵を総動員して、①明確な意思をもって戦略を立て、②具体的なベストの手段（戦術）を選択し、③そして、すばらしい実行力をもってこれを実行していく、という、類まれな才能をもつ、男でもそう沢山はいない、魅力的な人物となっている。その上「美しい女性」ときているから、私のように「ちょっと変わった女」に弱いタイプには一目惚れの対象となる女性だ。

### <首飾りをめぐる実話の事件>

「マリー・アントワネットの首飾り」事件は本当に起こった事件で、この首飾りにまつわるスキャンダルは、1789年のフランス革命そしてマリー・アントワネットがギロチンの露と消えてしまう歴史的事実の一つの伏線になったものとのことだ。その史実の学問的・歴史的研究は、ずっと昔から続けられているらしいが、映画では、このジャンヌに惚れた、ちょっと変わり者の遊び人ヴィレット（サイモン・ベイカー）が登場する。彼はジャンヌの生涯をかけた目標を理解し、これに協力することに自分の喜びを覚える。そして最終的には、今まで宮廷の遊びでは経験したことのない、本当のジャンヌに対する愛情であったことを理解する。

物語はジャンヌとヴィレットの2人による、ヴァロア家再興のための「首飾り」を利用した陰謀を核として進み、ここにさまざまな宮廷での登場人物がからまってくる。他方王制の圧政に苦しむ民衆たちの不満は高まりを見せ、オーストリアからルイ16世の元へ嫁入りしたマリー・アントワネットに対する民衆の憎悪は、首飾り事件の発覚によって頂点に達していく。結局、ジャンヌたちの陰謀は白日の下にさらされ、ジャンヌたちは裁判にかけられる。そしてジャンヌは1786年5月窃盗の罪で有罪となり、白い美しい胸に、泥棒を意味する「VOLER」の頭文字Vの焼印（文字通りのコテによる印）を押され投

獄される。他方マリー・アントワネットは、1792年の王室の崩壊とともに逮捕・投獄され、1793年10月16日、断頭台の露と消えた。

「マリー・アントワネットの首飾り」事件に関与したそれぞれの人物達の有罪、無罪の別、そしてその後の人生は最後に字幕スーパーで表示され、興味深い。フランス革命そのものや、ナポレオンを中心とした革命闘争そしてマリー・アントワネットを中心としたフランス宮廷文化などに興味を持ち、またその前後の時代を彩った英雄、革命家美女たちの歴史絵巻が好きな人には、一見の価値ありのおすすめ作品だ。

しかし、そうでない人には退屈かもしれないね・・・。

2002（平成14）年2月記